

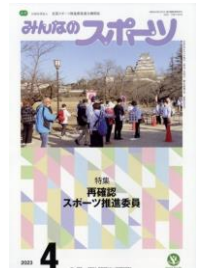
『みんなのスポーツ』4月号（No.492）から学ぶ

林 但

平素より協議会の活動にご理解をいただきありがとうございます。

表記、公益社団法人 全国スポーツ推進委員連合機関誌の4月号は「**再確認**
スポーツ推進委員」の特集号です。

私の視点で今月号で気づいたこと・参考になる点を3点記載します。



1 質問玉手箱「連絡調整はどう考えればよい？」

スポーツ推進委員には上記が期待されていますが、「地域には多様な組織・団体がありどう考えたらよいか混乱する」との質問です。

H23年にスポーツ基本法で“スポーツのために事業に実施に係る連絡調整”がスポーツ推進委員の役割と規定されてから、頻繁に“連絡調整”や“コーディネーター”として機能が強調され、地域に存在する多様なスポーツ団体やスポーツ、健康・福祉関係部局などの連絡調整の必要性が指摘されました。(中略) 先に記載の機関とは協働関係がありますが、2つの考え方がありと回答では書かれています。

1つ目は「**資源依存**」、自分の組織には資源が不足しているので他団体に頼る。例えば、地域のスポーツ施設が不足しているので、学校開放に依存。他方、学校は運動部部門などの指導者が不在だから、地域の指導者に頼る。不足する資源を補い合う「**協働関係**」です。

2つ目は「**協働戦略**」という発想です。地域の生活課題を明確にしながら、どんな地域スポーツや地域生活に志向するのか、子供や高齢者の生活を構築していくか関係者で議論し、共通の目標を確認し共通の目標を戦略的に構築し、スポーツ推進を図るという考え方。

2月に開催された「スポーツフォーラムよこすか2023」でスポーツ庁長官室伏氏が横須賀には縦割りではなく**横の連携を望む、「横須賀モデル」を作って**ほしいといわれた言葉が浮かびました。また、全国リーダー養成講習会で講師の方が**まずは、スポーツ推進委員は実技指導**できることが大事とも言われていました。その上でこのコーディネートスキルを高めましょう。

2 特集「再確認 スポーツ推進委員」

1) 巻頭言や理論1～4までそれぞれ関心ある内容ですが目に留まったのは、理論2の広島経済大学教授で広島市スポーツ推進委員の松本耕二氏の「法的位置づけと役割」の中で、スポーツで地域を創造するスポーツ推進委員の中に次のような文面が出てきます。誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく、私たち一人ひとりが知恵を絞って (中略) 「何ができるか」、そして「いかに地域の問題解決ができるか」を考えること。すなわち新しい考えを創造できる資質を持った委員を目指しての記載には同感です。

2) 理論4では、武庫川女子大学教授の柳沢和雄氏の「委員の選任・委嘱」をめぐる課題では、R4年度スポーツ推進委員の全国調査によれば、回答市町村からは**なり手がいない、人材不足**があげられています。以下の内容は数か月前のこの項で速報版から気づいたこと林が意見を記載しており一部重複するところがあります。

委員の選出母体では、「町内会、学区（公民館含む）など地域組織」が55.2%と最も多い、横須賀市も同様。ついで、「教育委員会・主管課の推薦」17.1%、「スポーツ・レクリエーション団体」8.6%、「**一般公募**」7.4%などです。3月の全国リーダー養成講習会でもこの内容はグループ討議いたしました。その中で「公募」です、グループ討議の中でも活用している市がありました。

委員になった人は意識が高く、責任感も強いと討議の中で話していました。同様なことは県内でも採用されており、理事会などの場で確認致しました。欠員が20名以上になり考える時期ではないかと考えています。以下に職業別の委員状況は下表の通りです。

	職業	(%)
1	会社員・団体職員	44.9
2	自営業	13.3
3	無職（主婦・パート含む）	7.7
4	公務員（学校教職員除く）	6.8
5	学校教職員	3.7
6	介護福祉関係	2.1
7	医療関係者	1.6
8	スポーツ指導者	1.1
9	学生	0.3
	R4年度 N=3907	

全国の講習会の中でも話題に出ていたのが、教職員のOB活用を上手に行い、文部科学省が進める学校運営協議会とも連動しており有効な方法だと紹介がありました。

また、柳沢氏はスポーツ推進委員がスポーツの枠を超えてより地域課題に対応しようとする姿であり、「学生」が選任されている姿も見えてきたと記載されています。それはなり手不足、定員割れの状態が続く状態では、学生への委嘱は“学生の成長につながる”“卒業後は地元で委員に”と前向きな意見がでてくるようになりました。

繰り返しになりますが公募、教職員の活用や学生などについては考える時期ではないかと考える昨今です。

3. げ・ん・き 活動日記

委員3年目・33歳で会長を仰せつかった方が、委員が自ら気づき、自発的な組織づくりのために行動する取り組みです。目に留まったのはコロナ禍の事例で、雨の日に体育館で練習する陸上クラブの隣でニュースポーツをして、「それ、なんですか？」と子どもたちが興味を持ってくれるのを待つ。これがなかなかで子どもからこどもへ、子どもから親へと話が伝わり、口コミで周知が広まっていく・・・好循環だそうです。逗子市の「モルック」に似ている考え方。

今月号では3つの事に記載致しました、知っていることが多いと思う方もあるかもしれませんが、気づいたことでできることから始めて（行動）みませんか？

* **本冊子は有益で私たちの活動のヒントや答えがある**ように私は思います。年間購読されなかった方は、個別にも購入はできますので一度読んでみてください。問題意識や感度を高めていくと紹介されている事例が使える場合とこのままでは使えないがこうすればできる。こんな方法もあるなど感ずると思います。是非一緒に取り組んでいきましょう！

以上